

会議名	EFAFF2006（第7回農林水産環境展） 開催テーマ 「人と自然との共生を目指して～農林水産業におけるバイオマス利活用と環境対策～」
開催日時	平成18年8月31日（木）10：00～17：00（開催期間8月29日～9月1日）
開催場所	パシフィコ横浜（横浜市西区みなとみらい1-1-1）
主催者	農林水産環境展実行委員会（委員長；今村 奈良臣 東大名誉教授） 後援；農林水産省、環境省、国土交通省、経済産業省、全国知事会、神奈川県ほか、 協賛；多数。事務局；(株)環境新聞社
参加人数(概数)	主催者見込み、約6千人（1.5千人×4日間、出展関係者込み）
1. 会議の概要	<p>農林水産環境展実行委員会が主催した標記の展示会（出展社・団体数72）と併催の「農林水産環境シンポジウム」、さらに隣接ホールで開催されたウエステック2006「廃棄物処理・再資源化展」に出席し、下記の畜産技術開発関連情報を収集したので報告する。</p> <p>展示；(資料別添)</p> <p>出展者数、規模ともに前回（平成17年12月幕張）より2割程度の減。</p> <p><u>バイオマスコーナー</u></p> <p>半年前に開催された前回（第6回）に比べ、バイオマスエネルギー関連展示の割合が多くなり、堆肥化・飼料化関連が少なくなっていた。一方、炭化・乾燥・バイオマスプラスチック関連が多くなり、環境問題に対する世の関心の推移を示していることが伺われた。</p> <p>・(株)オカドラ；前回同様に乾燥・炭化・コンポストの装置、プラント、施工からレンタルまで多彩に幅広く展示。これらの装置、システムは残飯・食品残渣の乾燥、飼料化の現場で即利活用可能とみなされた。</p> <p>前回のような、生ゴミ飼料化装置、オカラ・焼酎廃液飼料化システムについての展示は殆んど見られなかった。</p> <p><u>水処理コーナー</u></p> <p>畜産に係るものとして農業集落排水施設関連、畜産廃水処理装置、などが展示されていた。</p> <p><u>環境保全コーナー</u></p> <p>環境保全型農業関係として、有機栽培、残留農薬測定・分析、温暖化対策、に関連するものが展示されていた。</p> <p>・(株)コーンズおよび(株)土谷特殊農機具製作所；ともに従来から酪農機械・器具を専門としている会社であるが、海外企業と提携したバイオガスプラントを展示。国内酪農経営への新規導入が全国的に進展している状況が理解できた。</p> <p><u>衛生コーナー</u></p> <p>畜産消毒・殺菌・抗菌関係、検査・分析・脱臭関連のものが展示されていた。</p> <p><u>大学等展示コーナー</u></p> <p>前回出展の・帯広畜大地域共同研究センター、筑波大が展示を続けていたが、 ・東京農大、千葉県、東京農工大等からは出展されておらず、新しく神奈川県、熊本大、千葉大などから出展されていた。</p> <p>シンポジウム； 「北海道十勝のバイオマス利活用に関する産官学の取り組み」 (8月31日13：00～15：00 参加料1,000円、(別添資料) 主催が道十勝支庁、十勝バイオマス利活用推進会議、司会・コーディネーターが推進会議事務局のNPO法人コミュニテイシンクタンク「あうるず」。</p> <p>プログラムは ①十勝でのバイオマスに関する取り組みについて；(北海道十勝支庁地域振興部長) ②十勝のバイオマス資源について；(北王コンサルタント(株)環境規格部係長)</p>

	<p>③畜産系バイオマスエネルギーに託す地域の期待と展望；(帯広畜産大学助教授)</p> <p>④北海道十地域におけるバイオエタノールの取り組みについて；(十勝圏振興機構課長)</p> <p>⑤十勝でのバイオディーゼル燃料事業の取り組み；(十勝エネルギーネットワーク検討委員会委員)</p> <p>⑥木質バイオマスの取り組みについて；(とちちペレット協同組合代表理事)</p> <p>特定分野に限られてはいたが、十勝地域におけるバイオマス利用についての取り組みの一端を伺い知ることができた。自給飼料資源が乏しい十勝地方の畜産は今後とも加工残渣の農産副産物を利用した畜産を目指すべきものと思われ。しかし、十勝の農産物には高品質加工食品の原料として多様な用途があり、この競合の中で畜産が飼料資源を確保するためには、競争で高くなる飼料費に見合う付加価値の高い畜産物の生産を目指す必要が有ると感じさせられた。たとえば、チーズ工場からのホエーを蛋白源とし、これにエネルギー源となる農産副産物を組み合わせた資源循環型の特色のある銘柄豚肉生産の養豚業などが考えられよう。</p> <p>木質バイオマスの燃料エネルギーとしての利活用について、現地の林業者による実用段階までの取り組みについて目覚しいものがあり、フローアからの関心もこれに集中していた。</p>
2. 今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表課題・話題提供名	<p>我が国の食料・飼料自給率向上が農水省の行政目標として掲げられているが、少なくとも十勝地域においては、その数値目標の達成はかなり困難なようで、他分野と競合関係になり易い飼料利用については、技術開発、利用システムの開発についての研究投資が必要であろう。</p>
3. その他の発表課題で関心のあったもの	
4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等	<p>我が国におけるバイオマス利活用を飼料化に誘導するような技術開発課題を掘り起こす必要がある。</p>
5. 会議の所感	<p>前回同様に開催テーマが「人と自然との共生を目指して～農林水産業におけるバイオマス利活用と環境対策」と幅広いこともあり、農林水産環境シンポジウムと銘打っても主催者、出展者、出展メーカー、それぞれの持つ思惑の多様性を感じさせられた。</p> <p>この展示会を国内バイオマスの畜産・飼料への利活用という視点から見ると、飼料化は現状では競合する出口であるガス・発電エネルギー化と競り負けている。この原因として日本政府の総合的なエネルギー政策による後押しもあるが、飼料化による畜産利用に過度の期待を持つことは無理なのではないかと感じられる。</p> <p>また一方、家畜ふん尿処理施設・装置・技術の分野はこの展示会では、一步後退した感じで、我が国の家畜ふん尿処理問題が一段落し、技術も安定期に入ったことを示ものと考えらるべきか、ほかに理由のあるのか今しばらく国内状況を見守る必要がある。</p>
報告者	針生 程吉